



スポーツの喜びを全ての人に

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が迫る中、
注目の集まる障害者スポーツ。
県内のあらゆる人にスポーツの楽しみを伝える福島県の取り組みが、
世界へと発信されている。

福島県

福島県
東北地方の南部に位置し、面積は全国3位。太平洋沿いの浜通り、中山道沿いの中通り、山岳地帯の会津と、気候も文化も多彩な3地方で構成される。気候の幅を生かした多種多様な農産物や、名産の米と湧き水を生かした日本酒なども有名。さらには数多くの自然公園を擁し、観光やレジャーでも人気が高い。



福島県の障害者スポーツ事情を説明する丸山内さん(左)の話に聞き入る研修員たち



創意工夫を凝らしてディスクを作る研修員たち。文字やイラストを加えたり、テープの色を生かしたりと、多彩なディスクができあがった



若松さん(左)の指導を受けて、ディスクの遠投を練習する研修員たち。若松さん自身も、普段は特別支援学級で教えている



アシスタントを務める母の里美さんに車椅子の位置を調整してもらいながら、正確にボールを投げるボッチャ選手の遠藤裕美さん



アキュラシーの的を囲んで。アイデア次第で、障害者を含む多くの人にスポーツの楽しさを届けることができる

向ける視線も変わってきています」と説明した。
福島県は障害者スポーツに割く予算が決して多くはなく、設備も十分とはいえないが、これまで多くのパラリンピック選手を輩出してきた。自然と優れた選手が育つように、障害者がスポーツを楽しむやすい環境をつくっていくのが、県の方針だ。

障害者スポーツは決して特別ではない

丸山内さんは「小学生向けのバスケットボールでゴールの位置を下げるのと同じように、障害者スポーツもプレーヤーに合わせたルールを採用しているだけで、特別なスポーツではありません」と強調する。例として、当日は二つの障害者スポーツの体験が行われた。実際の競技会では競技用ディスクが使われる

が、講師を務めた福島県障がい者スポーツ協会の若松伸司理事は「自分たちでディスクを作ってみよう」と、研修員たちに紙皿とテープ、ペンを配り始めた。紙皿の上側にダンボールを貼り付けると、なかなかよく飛ぶディスクになるのだという。「ディスクに絵を描いても楽しいですよ」。若松さんがアドバイスする中、研修員たちは創意工夫を凝らしてディスクを作った。

この日、体験したのは、5メートル離れた枠の中にディスクを投げ込む「アキエラシュー」と、飛距離を競う「ディスクスタンス」。体育館に枠が設置されると、研修員たちは自分の作ったディスクを使って練習を始めた。最初はなかなか入らないが、コツをつかむと徐々に枠に入るようになってくる。「枠はフラフープのようなものを活用してもいいんです」と、若松さんは笑った。

続いては、競技用のディスクを使い、ディスクスタンスの投げ方を練習した。若松さんは、ディスクを真っ直ぐに、あるいは遠くに飛ばすための握り方や投げ方、スナップの効かせ方などを、自ら実演した。スリランカで特別支援学級の教員を務めるラシカ・ラサンティ・セマウィサナラゲさんとナイドウ・ハンディ・ブドゥ・スレカ・デシルヴァさんが「私たちの学校にはダウン症の児童が多いので、低学年から投げ方まで教えるのは難しいかもしれません」「低学年は自分たちでディスク作りを楽しみ、高学年にこうした競技のルールを教えるのとよさそうです」と話し合っているのを聞いて、若

「誰にでもスポーツを」 県ぐるみで目指す

詩人・高村光太郎の妻・智恵子が、ほんとの青い空が出てい」と語った。福島県の安達太良山。そのふもとに、青年海外協力隊の二本松訓練所がある。大きく冷えた10月のある日、二本松訓練所の体育館に、ちよつと変わった顔ぶれが集まった。世界各地で障害者教育や障害者スポーツの普及に努める12人の研修員だ。公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会の丸山内雄大さんが福島県の障害者スポーツ事情について話し始めると、彼らは熱心に聞き入った。

福島県は広大な土地に約190万人が住み、国内でも比較的人口密度が低い。県内で障害がある人は11万6000人になるが、面積の広さがスポーツも含めた障害者へのサービス提供においては課題の一つとなっている。福島県には今も障害者向けスポーツ専用の施設はなく、健常者向けの施設を利用してさまざまな活動を行っているという。カリブ海の島・セントルシアの特殊教育学校で教師を務めるランス・アーバン・ジョージさんが「以前はどうやって活動していたのですか」と尋ねると、丸山内さんは「既存の体育施設を使用していましたが、障害者にとっては使いづらい部分がありました。しかし、1995年に国体と合わせて開催された、全国身体障害者スポーツ大会」をきっかけに障害者も使いやすいように改修し、より活動しやすくなりました。その結果、参加する障害者の意識だけでなく、健常者が障害者スポーツに

松さんは「ダウン症の子は関節の動きがしなやかだから、それを生かして驚くほど遠くまでディスクを投げることができると言います」と助言した。
もう一つの体験種目はボッチャだ。ソフボールの球より一回り小さい、プラスチックビーズが詰まった球を投げたり、転がしたりして、的となる白いボールにできるだけ近いところに自分のボールを送りこむ球技だ。この競技では、福島市在住のボッチャ選手、遠藤裕美さんがゲストとして参加。母の里美さんに車椅子の位置を調整してもらいながら、正確的に向かってボールを投げる遠藤さんに、研修員たちは歓声を上げた。ところが自分たちで挑戦してみると、的を近くに置いてもなかなか思い通りにいかない。研修員たちは、競技ルール通り2チームに分かれて、熱心にボールを投げ合った。
遠藤さんと一緒にボッチャを楽しんだソロモン諸島パラリンピック委員会委員長のエルマ・ニナ・デイヴィスさんは、「ここで学んだことを生かして、私の国でも障害者スポーツを盛んにしていきたい」と笑顔で話してくれた。
「障害者スポーツの価値は4つあります。リハビリとしての役割、地域活動としての意義、競技としてのスポーツ、生涯活動としてのスポーツ。そのどれもが大切です」。丸山内さんは、そう訴える。「選手になる人ばかりでなく、純粹にスポーツを楽しむ障害者が増えること、そしてスポーツが地域の共生の架け橋となつて、多くの笑顔を生むことを願っています」